

桜はパンツを握ったまま戸惑っていた。

助けを求めようにも、凜は冷静そうに見えてかなり混乱しており、桜に構うどころではなかった。

何かぶつぶつ言いながらその場に立ち尽くして、英雄王を見ていた。

「士郎のより……」という言葉が桜の耳に届いたが気にしないことにした。バゼットは勝手にやっていると云わんばかりに離れたソファに座っていた。

ここで帰ってしまわないところに何か思うところはあるのだろうか。

カレンは液体に浸した指をかざすように英雄王に近づく。

その液体は粘度があり、てらてらと蠟燭の光に輝いている。

彼女はその光る二本の指を、全く躊躇なく、乱暴に英雄王の菊の穴にねじ込んだ。

「むうっ！ むうううっ！」

英雄王の肢体が飛び上がる。

全身でカレンの指を拒む小さな身体に、彼女はぐいぐいと指を押し込んでいく。  
「むぐっ！ むうううっ！ むがああっ！」

英雄王の苦痛の表情を、カレンは愉快そうに見つめる。

「ふふふ、あの小生意気なこの子が、こんなに可愛く……」

少し恍惚の入った声。

指は一旦根元まで挿入れた後、今度は徐々に出し、また挿入れた。

「むっ、むう！　むうう……」

英雄王の全身から汗がにじみ出る。

元々大きかった英雄王自身が更に大きくなった。

カレンの攻めは徐々に早くなり、そして乱暴になった。

「むっ、むっ、むううん！」

英雄王の声も、カレンの指の動きが早くなるごとに大きくなり、色を帯びた。

「いいわ、ふふふ、いいわ、ああ、いいわ！　可愛い、可愛いわ英雄王、ふふふ、

あはははは！」

うなされるような声を漏らし、カレンは反復行動を高速の域にした。

「むっ！　むっ！　むっ！　むっ！　むぐううう！」

回転を加えて捻じ込むカレンの細い指は、潤滑油のような例の液体が光っている。

それは英雄王の菊の中を滑らかに、そして熱くしていた。

それを、ソファに休んでいるカレンが告げる。

「ギルガメッシュ、凜が付いているパイプの形は、あなたのものを模ったものよ。どこかの雑種ではなく、自分自身に犯されるのなら、プライド高いあなたも満足でしょう」

涼しげに。

親切心での行動であるかのように微笑むカレン。

それは英雄王だけでなく、凜すらも背筋を凍らせた。

「き、貴様……」

英雄王の声にほんの少しだが、驚きと恐怖が混じる。

常に自信家である彼のそんな声を聞いたのは、カレンすらも初めてだった。

カレンは赤い、悪魔のような眼で、上品に笑った。

「ふん、あの破戒シスターの言いなりになるのは癪だけど、ここまで来たらやるしかないわね。行くわよギルガメッシュ。覚悟はいい？」

「ま、まて、雑種。我とあの女、どっちの命令を聞くのだ！ どちらが高貴か、今

「一度考えよ！」

英雄王は、それでもまだプライドを保ったまま、凜に叫ぶ。

「生憎、どっちの命令も聞かないわ——」

凜は冷めた目で英雄王を見下ろす。

右手でバイブのスイッチを入れる。

ぶおおおおん……。

「っ！」

バイブレーションの刺激に少し身を縮める凜。

だが、気丈にもその姿勢は保ったままだ。

「わたしは、わたしの命令にしか従わない……っ！」

唸り上げるバイブレーションが英雄王の菊に迫る。

「ま、まで……っ！」

「覚悟なさい、英雄王」